九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[008] 語文研究表紙奥付等

https://hdl.handle.net/2324/10288

出版情報：語文研究. 8, 1959-02-01. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

れらは又筆を変えて出来たものであって、記事の精粗あり歌句の異同などあって、互いに欠けたるを補い簡なるを詳かにするものがある。若しそれその書簡に至っては周囲との関係・交情は勿論、日記を補説する数数があって、望東の伝記の裏づけとして亦無くてはならない役目をなしている。

家集向陵集は、言道の門に入ってより上京以前二十年間の歌を集めてあるが、更にその活躍期にして最も波瀾の多かった時の歌は、日記、及び書簡の中にこの多数が保たれているのであって、我等はこれらのすべての歌を見渡して、始めて彼の作風の如何及びその時代的変化などをも精しく知るべきであろう。散文に於ては日記が主をなしているが、中には事実を取捨し行文を推敲して十分整った成稿のものあり、自由奔放思うがままに書き流した草稿のものあり、更に書簡に至っては相手の親疎・男女・高下等による文趣の異なるものがあって、それら何れもが彼の女の非凡な彩筆を味わせてくれるものである。

望東は我が福岡の生んだ希世の女丈夫であった上、歌文に於ける天成の異才であって、我等は郷土的に一種の思慕を抱くものであるが、又その地理的・人事的の環境をよく知る我等は、その歌文に表れ来る地名・人名・土俗・方言等に対しても、他地方人に比して、より深い理解をもち得るのであって、特に我等の注意がこの全集に引かれる所以である。歌は勿論歌文も共に用語が擬古のものであって、今日の手軽い口語体の読物に比しては、とかく現代人に見放されれ勝ちのものではあるが、力めて味読する読物として広く世に勧めたい一書である。因みに本書によって描き得る女性望東尼の特異な性格曲折ある生涯は、これを劇映画の材として、十分観者の興味を捕え得るもののあることを感ずるものである。終に郷土業界の有志の協助が、この書の刊行を遂げしめたことは、亦望ましき斯界の一美事と讃えてよいであろう。昭和三十三年十月十五日稿　おわり

紹介

目加田さくを編註

平仲物語冷泉為相筆

著者はすでに「日本小説史概論上」（昭和28・11）および（平仲物語註釈』（昭29・1）を公けにされて、著者の抱懐される日本小説史論の構想の一端を、大局からの史的概観と、個々の詳論とを平行して試みることによって示されたが、本書の出版は、かつて「平仲物語註釈」出版に際し、天下の孤本である静嘉堂文庫蔵本の「本文全部、少くとも問題のある文字だけでも」影印を望まれながら、やむを得ない事情のため活字翻刻とされた、著者そして予想される多くの読者の希望を満たされたものである。原本表裏紙の写真二葉を収め、影印本文百二十一頁、全四十段の七十六頁にわたる活字飜刻に頭注を施し、解題として㈠、原本、その所在、㈡、書名、㈢、名義、㈣、作者、主人公、㈤、本書成立年代、㈥、様式、㈦、研究書の各項目にわたって簡潔に記述されてゐる。縦五寸六分、横五寸三分の原寸そのまゝ文字及文字面寸法等一切祖本に忠実に影写整版された優雅な本書は、従来の平仲物語研究を大きく推進する重要な役割を果たすことであらうし、大学高校の教材テキストとしては、活字王朝文学と違った好ましい結果をもたらすことゝ思はれる。なほ著者は本年三月、旧版「平仲物語註釈」を修訂し、「平仲物語新講（武蔵野書院刊、定価三〇〇円）として上梓されたことを併せて御紹介申しあげる。（武蔵野書院刊、昭和33・4・30、二〇・五糎×十七・四糎、二〇七頁、定価三〇〇円）（森山　隆）